「左官」の可能性を追求する

株式会社 杉本プラスター

左官を用いた展示

左官を用いた展示

会社外観

時代の流れとともに、日本古来の建築技術である「土壁」や「漆喰」の職人が減少している。そんな中、新たな取り組みで「左官」技術を発信し、業界の発展・伝承を目指す株式会社杉本プラスターを紹介する。

杉本プラスターの歩み

株式会社杉本プラスターの歴史は、現社長である杉本幸樹氏の祖父が個人で左官業を創業した1897年(明治30年)に遡る。その後、1988年に法人化し、左官工事を軸に、建築内装工事への参入や、土木事業を請け負う別会社を設立するなど、複数の事業を展開しながら企業としての歩みを進めてきた。

同社で受注する工事は、民間住宅の建築・改築や大手ゼネコンの下請けのほか、公共工事にも及ぶ。足元では、公共工事の発注件数は減少傾向にあるが、民間住宅のリフォーム市場が活況を呈しており、同社の中心的な事業も時代とともにシフトしつつある。

代表取締役社長　**杉本 幸樹** 氏

企業概要

所在地	三重県鈴鹿市中箕田1-22-13 TEL:059-385-0133(代)　FAX:059-395-2003
設立	1993年(平成5年)
資本金	1,000万円
従業員数	5名
事業内容	内装工事業

左官の技術

そもそも「左官」とは、石灰や土、砂、自然繊維などを組み合わせた自然素材からなる塗り壁を作り上げる技術の総称であり、「左官職人」とはその技術を有する人材を指す。

杉本社長の左官職人としてのキャリアは、高校卒業後、東京にある日本左官連合会職業訓練短期大学（現在は廃校）に進んだことに始まる。在学中は、左官職人の第一人者として知られる山崎一雄氏に師事しながら左官のイロハを習得し、卒業後は山崎氏の弟子で、左官名人として知られる榎本新吉氏のもとでその技術を磨いた。

左官で作られた壁の代表例として漆喰（しっくい）壁がある。漆喰壁とは、石灰に砂・スサ・海藻糊等を混ぜた塗料で、住宅の壁や天井に使用される。独特な風合いの壁面は、鏝（こて）を用いて職人により丹念に仕上げられ、表現方法も多彩である。

杉本社長は、「左官技術を用いて作られた壁は呼吸する」と表現する。自然由来の素材で作られた壁は、湿気の調整機能に優れ、部屋を快適な湿度に保つ。過ごしやすい住環境をつくり出すことに加え、衛生面・環境面でも優れている。

泥団子

左官業のトレンド

現代の建築市場においては、低価格、短工期の工法が主流であり、プレハブ建築等が好まれる傾向にある。繊細な表現が可能である左官工事であるが、施工に時間を要するという弱点もあり、足元の建築市場においては厳しい競争環境にある。

また、歴史ある技術を支える職人の減少という深刻な問題にも直面している。現役の左官職人は70歳代の団塊の世代が中心であり、この世代が一斉に引退するタイミングで職人が激減し、技術伝承への懸念が顕在化する。

一方で、大きな社会の流れが左官技術に対する追い風になりつつある。キーワードは「サステナビリティ」、社会全体の持続可能性を高めようとする動きである。環境・経済・社会などの観点で、個人が社会にどのような影響を与えるかを考えようとする現代の消費者の価値感が、環境面、衛生面に優れた左官技術の特性と合致しており、特に若い世代が古民家再生や、趣味で行うDIYを通じて左官技術に再注目している。これらの消費者による、こだわりを詰め込んだ住宅の新築や改築に対するニーズは、新たな市場可能性として期待されている。

復古、創生に向けて

このように、左官業をとりまく環境は、足元の課題もあるが、大いなる展開の可能性も秘めている。杉本社長は、これらの状況を良き方向にひとつ歩みを進めるために、従来の左官仕事にとらわれず、新たな左官の魅力を探求するプロジェクト「泥壁左官（どろかべさかん）」を立ち上げ、業界全体の活性化に向けた各種の取り組みを行っている。「泥壁左官」のコンセプトは、「出会い」である。プロジェクトの中で、多くの人々を巻き込んだ企画を実施し、「泥壁左官」の全国的な知名度・認知度の成長と共に、左官技術の再興を目指すという試みである。

左官フォーラムみえ2017特別展「左官×実験」の開催

杉本社長は、「魅力ある左官技術であるが、家を建てる多くの人に、技術そのものが知られておらず、新築や改築の際に、そもそも左官を活用するという選択肢が検討されていない」と力説する。そこで、新しいモノ・コトに関心がある人が集まる場に左官技術を持込み、技術を発信する活動を行っている。

フォーラム

2017年10月、津市で「左官フォーラムみえ2017特別展『左官×実験』」というイベントを開催した。イベントでは、日本古来の建築技法である「左官」、三重県の伝統文化を代表する「伊勢型紙」、芸術文化の一部である「彫刻」の3者をコラボさせた各種の製作物が展示された。彫刻作品を発泡板に埋め込み、表面を漆喰で塗りこんだ作品や、平板を漆喰塗りしたベースに色を載せて絵画調に仕上げた作品などに加え、左官の技術に欠かせない鏝（こて）等も展示され、来場者を惹き付けた。会場には約300人が訪れ、来場者の中にははじめて「左官」という技術に触れ、関心を持つ人も多く、開催以降店舗や住宅の新築、改築に関する問合せも増加しているという。

作品

技術の伝承に向けて

杉本社長は、左官技術の発信に加え、その伝承のため、職人の育成にも積極的に取り組んでいる。通常、左官職人として、現場の工事を手がけるには最低5年の修行期間が必要であると言われている。また、職人の世界ではこれまで「目で見て、技術を盗め」という指導を行っているケースが多く、その習得までには長い時間を要した。

そこで、同社では、会社の敷地内に作業練習場を設け、左官工事の教則ビデオを活用しながら、新人職人に実践的な壁塗りの作業を集中して指導する期間を設けている。「技術習得の早期化が進み、現場に出るまでの期間が短期化すれば、職人全体の給与の安定や水準の引き上げにつながる」と社長は語る。

出会いの場をつくる

左官技術の伝承と、業界の発展に向けて「技術」と「人材」の両面で様々な取り組みを行う杉本社長が大切にしている商売哲学が「対等な取引」である。これは、提供するモノやサービスに対しては、適切な対価をもらうことが大切であるということ、裏返せば、モノやサービスの提供者は、消費者の対価に対して仕事を妥協してはいけないということだ。そのためにも、素晴らしい左官技術を提供したい「職人」と、潜在的に左官技術を求める「消費者」を適切に結び付ける「出会い」が必要と考え、「出会いの場」として「泥壁左官」などのプロジェクトを展開している。様々な素材を組合せ、ネットワークを丹念に築き上げる活動は、左官職人の仕事と重なる。業界の発展と、左官技術の追求に向けた杉本社長の挑戦は続く。

文＝地域調査部 中村 哲史